

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 5章1～11節

1このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、2このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。3そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、4忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。6実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。8しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10敵であったときさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章32～45節

32一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。33「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。34異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

35ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」36イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、37二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」38イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっている。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることが

できるか。」<sup>39</sup>彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。<sup>40</sup>しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」<sup>41</sup>ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。<sup>42</sup>そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。<sup>43</sup>しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、<sup>44</sup>いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。<sup>45</sup>人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

### 「自分の命を献げるために…」【こども説教のために】

わたしたちの教会の礼拝堂に入って、まず最初に目に留まるのは、聖壇の壁面に据えられた十字架ではないでしょうか。明るいクリーム色の壁に、こげ茶色の十字架が掲げられています。見慣れてしまうと、気にも留めなくなってしまいかもしれません。けれども、皆さんの中には、礼拝堂に入って来られるとき、まず入口で顔を上げて十字架を見上げ、小さくお辞儀をしてから席に進まれる方もあります。そのような方がいらっしゃることに気づいてから、わたしは、礼拝の冒頭に入堂し登壇する際、十字架を見上げ、小さく拝礼してから聖壇に上がり、席に着くようにしてきました。礼拝堂の一番奥に掲げられた十字架を、わたしたちが、ただの飾りとしてではなく、大切な貴いしるしとしていることを、牧師としてお示ししたいと願っているのです。

礼拝堂の各所に十字架が掲げられるのは、これが主イエスの死なれたところだからです。主イエスは、弟子たちと共に行かれた旅の終わりに都エルサレムに向かわれ、そこで捕らえられて死刑を宣告されました。そして、人々から侮辱されたり、唾をかけられたり、鞭で打たれたりした挙句の果て、十字架に釘付けにされて殺されたのです。十字架は、主イエスが殺されるために用いられた死刑道具でした。本当ならば、わたしたちの身近に置いたり、飾ったりするようなものではありません。

その十字架を掲げるのは、これが、主イエスのご生涯の目的地であったからです。主イエスは、ご自分が「**自分の命を献げるために来た**」とおっしゃいました。主イエスのご生涯は、自分の命を守るためのものではなく、だれか他の人のために献げられるためのものであったと、おっしゃられたのです。

弟子たちは、その主イエスに従いました。わたしたちも、その主イエスに従うよう招かれてきました。そのしるしが、目の前に掲げた十字架なのです。

## 「仕えられるためではなく仕えるため」

わたしの育った母教会は、礼拝堂の正面には、十字架どころか何も掲げられていませんでした。ただのコンクリート剥き出しの壁で、タイルも壁紙もないのです。実は、そのような教会も少なくありません。装飾のない無機質な造りによって、礼拝者が祈りに集中できるようにと考えてのことかもしれません。敢えて十字架を見える形で掲げないことで、十字架そのものを何かご神体のように扱われることを避けているのだと、説明されたこともあります。確かに、礼拝堂に入って十字架の前で拝礼しているところをご覧になって、十字架が礼拝の対象であるかのように勘違いされる方があるかもしれません。十字架は、飽くまで主イエスが向かって行かれたところを指し示す《しるし》に過ぎないのです。

もともと、主イエスは、ご自身の死が十字架刑によるということを、はっきりと語られてはいなかったかもしれません。ご自身の死を弟子たちに予告されたことを、「福音書」は三度繰り返して伝えています。幾度も、弟子たちにお語りになられていたということなのでしょう。ところが、その予告の中で、ご自身の死が十字架刑によるということをはっきりと語られたと伝えているのは、「マタイによる福音書」だけなのです。他の「福音書」は、かわりに弟子たちが主イエスの口から聞いていたのは、「わたしの後に従いたい者は、**自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい**」(マルコ 8:34)という言葉だけだったと、伝えているのです。

それは、「十字架につけられて殺される」ことよりも、「自分の十字架を背負って行く」ことのほうが、主イエスの教えの中では重要なことだということなのではないでしょうか。確かに「自分の十字架を背負う」のは、その先で「十字架につけられる」ためです。そうだとすると、「十字架につけられる」ことが目的なのではない、それは結果に過ぎない、ということです。つまり、主イエスは、「十字架につけられることを覚悟して生きる」ことを教えられたのでしょうか。その覚悟を言い表す言葉こそが、「自分の十字架を背負って」ということなのではないでしょうか。

弟子たちの中には、主イエスと共に殉教的な死を遂げることを夢想した者があつたかもしれません。けれども、主イエスが為し遂げられたのは、英雄の殉教的な死、ではありません。ご自身のものではない罪、だれか他の者の罪のゆえに、その罪を引き受けることでもたらされる死、です。

なぜ、そのような死がもたらされるのか。人に仕える者であるからです。僕として人に仕える者であるからです。仕える者は、仕えた者の何某かを引き受けるのです。良いものも、悪いものも、すべてを引き受けてこそ、本当に仕えたことになるのです。それが、死をもたらすことになっても、です。

## 「仕える者」の行く先

牧師を養成する神学校では、「神と教会に仕える」という言葉が繰り返し用いられます。牧師として教会に赴任するとき、新卒でも若くても、多くの場合に「先生」と呼ばれ、ちやほやされるのです。実際、神学校で一所懸命に神学の研鑽に励んで卒業したばかりの牧師は、天狗になっているものです。神学の知識で頭が満たされています。まるで神の神秘のすべてを知り尽くしているような勢いで、現場の教会に赴任していく者もあるのです。もちろん、「自分は神に仕える者だ」という意識は持ち合わせているでしょうが、どこかで、「自分は誰よりも神のお近くで仕えている者だ」と、過剰な思いが無意識のうちに働き始めたら、もう止められません。

わたしどもが神学校を卒業して最初に赴任したのは、九州の小さな地方都市の小さな教会でした。教会員が二十数名、礼拝出席は平均して十数名、という教会で、経済的には決して豊かな教会ではありませんでしたが、その分、信者の皆さんが至れり尽くせり、若い牧師夫妻のために労してくださいました。その中のお一人で長老格の老婦人から、こう言われたことがありました、「わたしたちは、代々の牧師先生に仕えてきましたから、先生にもお仕えます」と。とても驚きました。わたし自身は、生まれたときから教会に通いながら、「信者が牧師にお仕えする」という発想をしたことがありませんでした。神学校では、「牧師は教会に仕える者だ」と叩き込まれていました。ですから、その老婦人の言葉は、わたしを舞い上がらせるよりは、むしろ、その後の戒めとして強く心に刻まれたのです。

牧師として二十数年を重ねさせていただいた者として正直に言えば、「牧師にお仕えする」と言ってくれる方のある教会にお仕えさせていただけるのは、幸いなことです。教会が互いに仕え合う者の営みとして成り立つのは、「どんな牧師であってもお仕えする」と覚悟を決めて「仕える生き方」を貫いてきてくださった先達がいらっしゃるからです。

その先達も、また、ご自分たちより先に歩まれた先達の後姿を追いながら、「仕える生き方」を研ぎ澄まして来られたのでしょう。弟子たちが、主イエスの後姿を追ったように、です。

「皆に仕える者になり、すべての人の僕になる」生き方を、主イエスは、洗礼者ヨハネから「洗礼」を受けられたところから始められました。その同じ「洗礼」を、「あなたがたも受けることになる」と、主イエスは弟子たちにおっしゃいました。それは、人に仕えることによって「苦い杯」をも引き受ける道行きを始めることでもあるでしょう。しかし、その道こそが、後に続く者の生き方を変え、新しくするのです。「仕える者」としての姿を、「死してなお復活する者」の姿にまで輝かせるのです。